

黄瀬戸釉印花文敷瓦

これは日本のタイルの前身で、陶製の敷石「敷瓦」の一例である。敷瓦は土間に敷かれていたが、モルタルで固められていたわけではない。その角は少し丸くなっており、並べるのに便利になっている。

今回展示されている花模様の敷瓦は、当時の住宅に同様の瓦が見られることから、19 世紀末頃に瀬戸で作られたものと思われる。黄味がかった釉薬は、茶色の鉄釉と緑色の白雲母釉をむらなくかけた「黄瀬戸」と呼ばれるこの地方独特のものである。

敷瓦は、6 世紀に朝鮮半島から伝わった仏教建築の一つとして日本に伝わってきた。しかし、日本では木の床が主流だったため、敷瓦が広く使われるようになったのは、禅宗が盛んになった 12 世紀の終わり頃のことである。国内で生産される敷瓦は、特殊な燻製工程で炭素層を酸化させた銀色の黒いぶし色が主流である。

1652 年、徳川義直（1601-1650）の廟所建設のために、瀬戸で敷瓦が生産された。瀬戸の陶工たちはその技術を学んで地元で生産するようになり、典型的な黒釉だけでなく、瀬戸の伝統的なスタイルを取り入れたタイルを作るようになった。